

ウエストンも通った古の古道と穂高連峰の眺望 徳本峠・霞沢岳

実施日	2016年9月25日(日)~28日(水)		
天候	9/25 晴れ	9/26 小雨	9/27 晴れ 9/28 雨
リーダー	伊藤 久雄		
参加者	伊藤 久雄 計1名		
費用	☎ 5,450円	員 8,210円	
	宿泊 24,450円	合計38,110円	
タイム	9/25 新宿西口B T (8:55~12:55☎)松本B T~松本上高地線(13:28~13:58☎)新島々泊		
	9/26 石川旅館(05:40~06:15☎)砂防ダム(07:05)二俣(09:00)離れ岩(10:00)ワサビ沢(10:15~11:00 昼食)岩魚留小屋(12:17)徳本峠2.8k(13:05)徳本峠1.9K(13:34)ちから水(14:40)徳本峠小屋泊		
	9/27 徳本峠小屋(05:00~06:25)ジャンクションピーク(07:30)小湿原(10:30)K1(11:00)K2(11:15~12:00 昼食)霞沢岳(13:40)K1(14:33)小湿原(15:25)ジャンクションピーク(16:20)徳本峠小屋		
	9/28 徳本峠(08:00~09:50)徳本峠入口(11:20)上高地		

9/25 新しくできた新宿西口B Tからバスで松本駅まで行く。此処で昼食の予定でしたがバスが事故渋滞に巻き込まれ40分遅れ、上高地線乗り場も分からないので昼食はやめて電車に乗る。偶然にも2両編成の後ろの車両限定の土日限定「観光案内電車」に乗る事が出来ガイドさんの13ある各駅の説明を聞きながら30分の楽しい時間を過ごした。

終点の新島々で降りすぐ近くにある石川旅館に泊まる。

島々は上高地の旅館や北アルプス南部の山小屋の主人が多い所である。

9/26 今日は徳本峠までのクラッシ

クロードに行く。宿の御主人に砂防ダムの近くまで送ってもらった。



今日は長丁場になるので40分程短縮出来ただろうか有難い。

今日は天気が芳しくないので合羽を着て

島々谷川を左に見ながらゆっくり歩く。

直ぐに砂防ダムが現れる。二俣までは約50分ほどで着く。其処を左へ島々谷南沢に向かって少し行くと「三木秀綱奥方の遺跡」が残っている。戦国時代飛騨の国の松倉城主三木秀綱は羽柴秀吉の軍勢に攻められ落城する。落ち延びようとしたが焼岳の中腹で惨殺され身ごもっていた奥方は別のルートで上高地から徳本峠を超えて島々谷辺りに来た時に殺害されてしまったと言う戦国落人悲話である。

徳本峠まで9.7kmの標識の近くに来ると奇怪な樹形の「あがりこサワラ」の木があり其処を左に折れゆっくりと登って行く。

山道はよく整備されていて歩きやすい。日に殆ど人が通らないのに風化して



いなひのは「古道徳本峠を守る人々」によって最低限の補修や整備がなされて守られているから有難いことである。

行き橋、戻り橋、瀬戸下橋、瀬戸上橋、ワサビ沢の橋、岩魚止橋その他名もない橋を数か所、水量の多い沢、滝のように流れている大小の沢の渡渉を繰り返す。途中10m程の細めの丸太2本に真ん中にさらに細い木をあてがってある丸太の橋が有る。水面からの高さは3m程だろうか雨でぬれていて滑りやすそう。足元では川が轟音を響かせ流れている。15分程をゆっくりゆっくり慎重に歩を進め

て行く。サーカスの綱渡りの心境である。さすがにここは怖かった。島々谷川から島々谷南沢のどこまでも続く溪谷美が素晴らしい。4時間ほど歩いて



やっと岩魚止小屋に着く。標高は300㍎位しか登っていない。まだ900㍎位

有る。小屋の近くに高村幸太郎が智恵子と待ち合わせをしたと言われている見事な桂の木が立っている。

この小屋の縁側でドライカレーにコーヒーで昼食タイムとする。

1時間程ゆっくりした後出発するとすぐ左前方に岩魚留の滝が現れる。徳本峠まで2.8㍎の道標を過ぎても相変わらず川は滝の様な轟音を響かせ流れている。

水量が豊富なのは森が豊かな証である。徐々に傾斜がきつくなり徳本峠まで1.9㍎の道標を過ぎると次第に



川の音が遠ざかっていきやがて聞こえなくなり辺りは静まり返り足音と荒い息だけが聞こえる。2、3度小枝かトチの実が落ちガサッと音がするとドキッとする。ここはツキノワグマの生息地である。ドングリは見なかったがトチの実はいたるところに落ちている。徐々に高度を上げていくと「ちから水」に出る。この水を飲み元気をもらい頑張って標高差400㍎程を2時間余りかけて登ると徳本峠が目の前に現れる。



天気があまり良くないので眺望はあきらめていたが目の前に迫

力のある穂高の岩峰が現れる。苦しい思いをして登って来て見る景色は感動ひとしおである。

早々に「見はらし台まで45秒」まで登り素晴らしい穂高の峰々を堪能する。



ウエストンをはじめ古の多くの人々が見た同じ風景を見ていると思うと感慨深いものがある。今日は徳本峠小屋「新館」に宿泊するが雨にもかかわらず多くの登山者で賑わっていた。

9/27日 ジャンクションピークの見晴台までは1時間、日の出は6時頃と小屋の主人に聞いていたので予定より少し遅らせてヘッドランプを付け出発するが5時40分にご来光

である。慌ててシャッターを切る。数分後今度は穂高がモルゲンロートになり



慌ててカメラを出しシャッターを切る。ストックを谷に落としそうになった。穂高がみるみる赤く染まっていく。周りの木々や黄葉も朝日に照らされ輝いている。上高地は雲海に覆われていて見えない。



ジャンクションピークに着くと視界が開ける。東の空に八ヶ岳、南アルプス、そ

の奥に富士山の頭が小さく覗いている。此の所お天気が悪かったせいか足元がぬかるんでいる所や粘土質の土、根っ子も多くスリップに注意しながら進む。

1時間ほどすると唯一の小さな鏡池の様な小さな池が現れる。

黄葉になり始めている樹林帯をアップダウンを繰り返して歩を進めて行くと左前方に霞沢岳やK1、K2がようやく現れる。



朝方は風も強かったが日が昇るにつれ収まり半袖でもいらいに暑くなる。

やや右に湾曲した狭い山道を登って行くと北東に常念岳、蝶ヶ岳、大天井岳が、更に高度を上げていくと眼下には黄葉が、秋の青空に穂高連峰、西穂高岳が迫ってくる。此処で引き返してもいらいの素晴らしい景色である。

更に進むとK1の急なルンゼ状の道になる。がれ場のようになっており落石に注意しながら登って行くが此処が一番つらい一気に汗が噴き出る。上高地から登ってきたと言う60%以上は有ろうかと思われるリュックを背負った女性に軽く追い越される。すごい女性もいるもんだと感心する。



K1からも360度の素晴らしい眺望である、しかし雲やガスも出だし一瞬で視

界が無くなったりする。K2は標識がなく頂上が良く判らない。

何回か登下降を繰り返してこれが最後だろうと左に回りこんで登りつめると霞沢岳の標識が目飛び込んでくる360度の大展望である。



北に穂高連峰、隣に独標その稜線の向こうに笠ヶ岳、西の眼下に焼岳、南にどっしりとした山

容の乗鞍岳、その左遠方に白山が霞んで見える。東は雲と陽の光で見づらいが南アルプス方面だろう圧巻の眺望である。もしこの山が(南)穂高岳と名がついて

いたら大勢の人々が大挙押し寄せていただろうし百名山にも選ばれなくて良かったと思う、この山も思っているだろう。

昼食を兼ねて1時間程ゆっくりした後來た道を引き返す。のんびりしすぎて夕食の時間に間に合わないので給水タイムを1分ほどにし、殆ど休まず歩いた。



長かった～1日に2山登った感じだ。水も2リットル以上飲んだ。今日は「登録有形文化財」に指定されている趣のある変則的な床の本館に宿泊する。今日も大勢の登山客でにぎわっている。

9/28 今日下山するだけなので気が楽だ。9時以降は雨の予報なので全員下山する。団体さんが下山した後ペペロンチーノとコーヒーで朝食を取った後下山を始める。

やや急な山道を黒沢にそって歩き沢を数回渡渉し1時間程するとなだらかな雑木林になる。白沢に沿って暫く歩くと「徳本峠入口」に出る。

左に行くと上高地である。上高地に着くと雨にも関わらず多くの人々でごった返していて帰りのバス便も幾



つか「満員」状態である。空いているバスの切符を確保してから3日間の汗を流して帰路に着いた。

素晴らしい穂高連峰の眺望や日本に近代的登山を開いたウォルター・ウエトン、「日本山岳会」を結成した小島烏水、芥川龍之介、高村幸太郎、かつて多くの登山家や人々が踏みしめた古の古道を歩けたのは良い思い出になった。

(記&写真・伊藤 久雄)